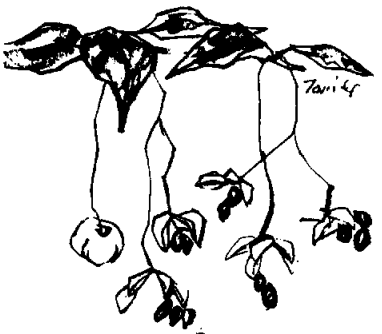

共存の道を求めて

宗像英雄

イェルマークのシベリア探険にはじまる旧ロシア帝国のシベリア東漸史は、そのままシベリア動物群の滅亡史でもあった。アメリカ合衆国の西部開拓史も然り、わが北海道開拓史もまた同じような側面を持つ。文明を追い続ける人間の営みの及ぶところ、必ず野生動物の滅亡、衰退という声なき悲劇が繰り返されてきた。それはいまも続いている。

戦後の熱帯林の急激な消滅は、森林の消失だけではない。そこに住む大量の動物群を、この地上から永久に抹殺し続けている。また、貴重な野生動物の多い発展途上国では、稀少な動物ほど激しい密猟の対象になっているという。先進国の虚飾が、それらを高価に買いとるからだ。

和人の進出による本道の開拓は、動物界の均衡に大きな変動をもたらした。オオカミなどの滅亡、テン、エゾシカ、エゾヒグマなどの激減、反面、ホンドイタチや家鼠類の進出、最近ではミンクの野生化が問題視されている。すべて人間の介在による動物界の栄枯盛衰である。いままた、ゼニガタアザラシの繁殖地は危殆に瀕し、エゾヒグマは安息の奥山ですら必ずしも安泰とはいえない。亡びゆくものへ差しのべる手はないものだろうか。

無制限に営利を追求する社会構造、それに支配され、惰性的に押し流される人間性、その延長線上には人間をも含めて救いはありえない。いまや新しい価値感へと一大転換が求められる時である。それをなし得るものは、人間のみが持つ英知ではなかろうか。

今回、「野生生物特集」を企画したのは、まさにこのような事態の打開をはかるためであった。ここに発表された数多くの貴重な研究が、野生生物の共存の道を開くための一助となることを期待してやまない。

（副会長）